

校歌歌詞解説

紫匂う

紫は野草の名。昔は根を乾燥して赤紫色の染料とした。かつては武蔵野の名草であった。匂うは「色が美しくつややかである、美しく映える。」

天与

「天から与えられたもの、天のたまもの、自然の恵み。」

規模広く

単に物理的な広さではなく、学習、クラブ活動、人間形成を含めて、全人的にスケール大きくの意。

礎

「石据え」で、「家屋の土台石」。それから転じて「物事の基礎となる大事な物事」の意。

秩父の嶺の・・・入間の水の・・・

秩父の嶺の・・・入間の水の・・・のはともに「のように」。

二

情思濃やかに

情思は「心の通い合い、思いやり。」濃やかに「心がこもっていて、こまかいところまでゆきわたっている。」

切徳の友誼

切徳のは「友人同士互いに励まし合って、学問や人格の向上に努める。切磋琢磨する。」

友誼は「友情」。

華美

内容がなくて、外見だけが華やかで派手なこと。

実

内容・中身が備わっていること。

徳をしく

徳は「正しい行いをする品性、人格。」しくは「敷く」で、「一面に物や力などを広げて、すみずみまで行き渡らせる」ことだが、ここでは「巾広く養って身につける」の意。

三芳野

三芳野神社のこと。学問の神といわれる菅原道真も祭神なので、「天神様」ともいわれている。

社頭の梅と

社頭は「社前、社殿のあたり。」とは「として、となつて。」

三

蛩に棲る鳥の跡 雪に尋ぬる文の道

蛩雪は、昔中国の晋の車胤という人が家が貧しくて灯油が買えないため、蛩を集めてその光で書を読み、孫康という人が窓辺に雪を積んでその明かりで勉強したという故事から。

大和心に西の志

鳥の跡は「文字」の意。中国古代の黄帝の時代、蒼頡という者が鳥の足跡を見て、文字をつくることを思いついたという故事から。文は「学問」。

大和は「日本」で、西は「西欧」。

才は「知恵のはたらき、学問。」

初雁の城址

初雁城は川越城の別名。

城址の月と輝かせ

現在の正門は本校創立百周年記念事業の一つとして改修されたが、本校は川越城址に位置しているので、この「城址に輝く月」をイメージしてつくられた。

本校校歌は開校十周年を迎えた明治四二（一九〇九）年に制定され、現在まで歌い継がれている。詳細については創立百周年記念誌『くすの木』の五八・五九頁を参照。

（埼玉県立川越高等学校同窓会）